

禁獵

区

丹羽文雄

禁 獵 区

丹羽文雄

講 談 社 版

昭和三十三年十一月三十日 第一刷発行

禁 猟 区 ©

定価 三三〇円

著 者 丹・羽文雄に・わふみお

発行者 野間省一

印刷所 東京都文京区関口町一四〇
慶昌堂印刷株式会社

発行所 株式会社 大日本雄弁会講談社

東京都文京区音羽町三ノ一九
振替 東京 三九三〇
電話大塚(94)三二〇一(代表)

目

次

輕井沢風物	七
狼狽	一四
再婚	一六
危い所	一三
同臭同好	一〇
友と友の間	九
空虚な家	无
ばら	六
非情	七
試験結婚	八
未解沢	九
友の評判	一〇
心と時間	一六
金錢に就いて	一六
その日のこと	一三
深夜の電話	一七
春夏秋冬	一四

梅を見にいく	一四
運命の岐路	一五
春の夜	一六
第一の男	一七
嫉妬の有無	一八
近い火の手	一九
忠告	二〇
第二の男	二一
妻とは名のみ	二二
衝撃	二三
あこがれ	二四
準備と愛情	二五
善良ゆえに	二六
開店	二七
狭霧	二八
水商売	二九
病氣見舞	三〇

魅惑	三六
ゆるしを乞う	三九
同じ患者	三三
待っているもの	三七
驚愕	三八
周囲の人	三六
廁のこと	三四
打ちひしがれて	三二
およしなさい	三六
路上の狂乱	六一
高いいびき	五三

禁

獵

區

輕井沢風物

十日間のホテル滞在中のスケジュールを組んできたのだが、予定どおりには仕事がかどらない。沖一英は、机をはなれた。小雨がふっていたが、いつの間にか上っている。部屋から眺められるプールには、だれもいなかった。プールの水が、ふかふかとまわりの深緑を宿していた。目がさめるような色彩である。いかにも冷たそうである。山の清水を引いたプールなので、子供たちは、くちびるを紫色にして泳いでいた。だれもないプールの風景は、山の静けさを映している。

沖は、廊下に出た。出合いがしらに、二人の洋装の日本婦人に会った。ボーイがスーツケースを持って、案内をしていく。ホテルには、外人客もいく組か泊っているが、いま沖がすれちがった日本婦人ほどの高級な服は着ていない。高級か安物か、婦人服については知識のない沖にも、何となく上物であることが分るのだった。ステージを歩くファッション・モデルが着ているような感じであった。よく似合うという意味ではない。仕立上りといった真新しい感じである。沖は、ふりかえって眺め

た。

何者か。沖には、見当がつかなかった。ホテルには、さまざまな職業の人物が出入している。フロントで修業でもしなければ、一ト目でびたりと客の正体をいい当てることは不可能である。どちらも二十七、八歳の年配であった。姉妹とは思えなかった。仲のよい細君同士かとも考えられたが、いずれも細君らしい落着いた感じからは遠かった。すれちがった沖を、臆せずじっと見つめるあたりは、普通の女性に出来る芸当ではない。

——いずれ食堂で、また顔を合わせるだろう。

そんなことに興味を抱くのも、ひとりホテルに泊っているつれづれの仕業にちがいがなかった。沖は、フロントのそばを通って、玄関に出た。が、すぐには階段を下りなかった。玄関から眺める三笠の風景が、気に入っている。深い樹立の中に、ホテルがおき忘れられたように感じられるからである。古いホテルであった。ホテルをとりまく樹木は、四、五十年を経ている。樹木の年齢の中に、ホテルがとけこんでいるようであった。

「奥さんがおいでにならなくなってから、もう何年になるでしょうか」

静かにそばに寄ってきたホテルの支配人が、沖に静かに話しかけた。

「さあ、何年になるか知ら」と、とぼけた。

「七、八年にはなるでしょうね」

二人は並んで、ふかい樹立を眺めやった。それきり二人は黙

つていた。二人とも樹立の一部になったようである。

「長い療養生活だ。まわりの者より、妻の方が飽き飽きしてるだろう」

思い出したように沖が言った。胸を病んで、沖の妻はすでに八年療養生活をつづけていた。

「お越しになるたびに、今年こそはとご期待申上げているのですが、毎年先生がおひとりなので……」

「ぼくがここへ来るのは、毎年の習慣にすぎない。感傷的じゃないよ」

支配人が微笑して、ちよつと頭を下げた。結婚した年、沖は妻の誓子をつれて、このホテルに二十日間ほど滞在した。妻が病気で倒れるまで、毎年その習慣がつづいた。沖はひとりになつてからも、その習慣をつづけていた。最初の一、二年は、妻のことが思い出されて、感傷的になつていたが、その時期が過ぎると、沖は東京の暑さを避けて、仕事を片付けるためにホテルを利用する事務的な気持の方がつよくなつた。今度も、九月に刊行する予定の原稿の整理にやつて来たものである。

「ちよつと散歩してくるよ」

「いつてらっしゃい」

玄関前の広場を横切り、樹立の道にはいると、奇声を発して三人の子供が沖を追い越していった。どの子供も、茶色の髪をしていた。

樹立が、しめつていた。雨にぬれた幹が、美しかった。こと

に赤松の幹が、美しかった。

ホテルのテニス・コートのあたりに来ると、空がひらけた。

コートには、誰もいなかった。道ばたの雑草の中に、竹煮草が白い花をつけていた。土地の人々は、毒草というので、この草に手を触れない。雑草の根強さで、竹煮草はのびのびと葉をひろげている。この草は、思いがけない薬草でもあった。そのことを、沖は去年ようやく知つたものである。ホテルに泊つていたドイツ人から、教えられた。アレルギー性の沖には、ありがたい教示であつた。沖は蛇にさされると、ふくれあがり、痛がゆくてたまらなかつた。一週間はなおらないのである。さされたところが、ただれて、そのただれが治るまでには十日間も要した。治つた跡が、半年の余も消えないのである。蛇を目の敵にするのも、アレルギー性のおかげである。

ホテルでは、毎年百本近い蠅叩きを用意しておく。が、夏が過ぎるころには、蠅叩きはこわれたり、紛失したりして、残りすくなくなつていくという。食事時に、ちくりと足もとをやる。雌が血を吸うのである。蛇は心得たもので、床の上をとびまわっている。放牧の馬でさえやせるといふほどの蛇の猛威である。

七月終りが蛇の全盛期のものであつた。九月にはいると、すくなくなる。が、たとえ一匹の蛇にしろ、沖には目の敵であることに変りがない。竹煮草をドイツ人に教えられてからは、蛇に対する恐怖が半減した。さされた跡に、竹煮草の茎から出る

黄色の汁をつければ、嘘のように痛みもかゆみも消えて、ふくれ上ることもなかった。

但し、黄色の汁を傷口以外にこすりつけると、かえってそこからただれるということがある。毒草のゆえんであろう。土地の人々が、あまりこのことを知らないのが、おかしい。

沖は、草輕線に沿って旧輕井沢へ向けて散歩の足をのびした。この通りが、いちばん氣に入っている。落葉松の並木が、印象的である。旧輕井沢の町まで、三十分はかかるのだ。沖は時々、自動車のために道ばたに寄らなければならなかった。毎年、車がふえているように思われる。そう言えは、去年からこの道をバスが通るようになった。それだけ自然がそこねられていく。しかし、まだ当分は大丈夫である。

縦の並木の美しい一画があった。石垣に苔が生えて、そこだけのはしみと歩いてみたい氣持になるところだが、今年から石垣に有刺鉄線がはりめぐらされた。苦むした石垣の風情は、殺された。そこまでが、沖の毎日の散歩の範囲であった。

ショート・パンツで自転車を走らせる娘たちにも、沖は慣れている。都会ではちよつと勇氣のいる輕快な服装も、輕井沢という觀念から、やすやすと勇氣が持てるようであった。涼しい高原に来て、ショート・パンツはおかしいと老人達はいうのだが、沖はそうは思わない。陽の下では、輕井沢といえども暑いのだ。が、いったん木陰にはいると、すうつと汗がひいていく。しめり氣がないのだ。空氣が乾燥している。ショート・パンツは、乾燥した空氣の中でこそ、その快活さが十二分に味われるというものである。

ひぐらしが鳴いていた。

沖は、ホテルにかえった。古風なホテルの窓からもれる灯の色も、いかにも古風な感じである。このホテルの宿帳は、そのまま骨董品であった。古い時代の有名人が、たくさん名を残している。沖がひろい食堂にはいると、ボーイが心得て、いつもの席に案内をした。

「何かお飲みになりますか」

「うん、いつものものをもらおうか」

と、葡萄酒を注文した。目をあげた時、背が低くて、ふとった男と、男よりも背の高い和服の女が二人、食堂にはいつてくるところだった。沖は、注目した。二人の女には見覚えがある。

廊下ですれちがった洋装の二人づれであった。あざやかな和服姿であるが、その着こなしようで、おのずと素性を現わしていた。和服の方が、いかにも自信ありげである。沖とおなじような驚きの目を向けている客も、ほかにあった。

——やはり粋すじの女だったのか。

洋装が、仕立上りのようで、十分身についていないのは、致し方がない。終戦直後は、洋装の芸者もあらわれていたものだが、最近ほとんど影をひそめている。柄に合わないことは、よした方がよろしい。和服になって安堵している女の氣持が、沖の胸にも通じた。沖が驚きの目を注いだのは、それだけではなかった。つれの男の異様な風貌である。胸が長くて、脚が短かった。大きな顔をもっていた。その顔には、これ以上贅肉の

つきようがないというほどに、肉がだぶついていた。異様な風貌の中で一抹柔和な感じを与えているのが、そのせいである。人目をひく美しい女を二人もつれて、食堂を睥睨するようには立ちどまった。ボーイが、そばに駆けよった。いかにも一代で財をつくり上げた人間らしく、厚かましい押し出しであった。

沖は、コップを口にあてて、苦笑した。六十歳に近いその男は、容貌怪異なくせに、どこか親しみやすい感じをもっていた。ボーイについて、そそくさと歩きだした。つれの女のことを忘れた歩き方である。すると、二人の女も、醜いからだつきの男のことは忘れた顔で、しかも男のついた席に歩をはこんだ。

鞠躬如として、男につかえている風ではなかった。女は女同士で、勝手な話をしていらしい。三人の中で、男だけが孤独になっている。その感じが、沖には面白かった。女達は、男を無視していることを、食堂の人々に見せつけている。女が声に出して、笑った。その様子は、いかにも女が二人して男をからかっている風であった。

「何者か、あの男？」

皿をはこんで来たボーイに、沖はきいた。

「百武製薬会社の社長さんです」

「つれの女は？」

ボーイは苦笑して、答えなかった。

「大体の見当はつくが……」

ボーイは、答えない。

「しかし、面白いね。あの二人の中のどちらかが、社長の情人

だろう。それでなければ、ここへ来るわけはないからね。あの二人は、押しつけ合っているよ。ごまかし合っているよ。自分がそうだと食堂の人々に見られることを、警戒している。恥ずかしいのだね。女の見栄だね」

百武は、二日前から滞在していた。食堂で一、二度顔を合わせていたのだが、沖が注意を払わなかったにすぎない。美しい二人の女性が現われたので、にわかに沖の興味をひくことになった。それだけでも、百武とすれば、女を東京から呼びよせたかいはあったというものである。

ホテルのロビーは、玄関をはいつた左右にあった。その長椅子に、沖は腰をおろした。大きな暖炉には、いままぐにも火がつけられるように薪の支度が出来ている。今夜は、火をたくほどの気候ではない。東京では三十度近くもあり、夜になってもじっとりと汗ばむというのが、嘘のようであった。たばこをくわえると、ボーイがライターをもって寄って来た。

「社長の奥さんが、明後日においでになります」

何の継穂もなく、ボーイが言った。沖は、とっさに分らなかった。が、分ると、複雑な微笑をうかべた。百武社長のことである。ボーイ達も、やはり社長のふるまいには好奇心を持っているらしい。

「変った人物だね」

感心するのは、沖が世間知らずということにあるかも知れない。温泉などに、妻以外の女を得々として連れてくる客があ

る。妻でない女であることを吹聴したがつていようであつた。そういう男の心理が沖にはのみこめなかつた。二人の女はどちらにしても、百武社長の妻でないことは明瞭であつた。それにもかかわらず、すこしも照れず、むしろ二人の美しい女を得意然とひきつれている。それも、男の見栄だろうか。製薬会社社長という地位と財力だけではもの足らず、若い美しい女をひきつれて、みせびらかすことによって、男の見栄坊が満足するのであらうか。沖には、いよいよ分らなくなつてしまふ。

——もしも自分なら、女を出るだけ隠しておくだろう。

妻以外の女性に心をひかれるということ、沖なら、自分に對しても隠していたい方である。

——あの二人の女性、すこしも百武社長に服従している様子がない。命令に従つて、ただ輕井沢まで来たにすぎない。あの二人には、社長の顔が札東に見えているのだらう。

二人の女がいつまで滞在するか、興味があつた。明日か、明後日の朝にかえるのか。すれちがいに、妻がやってくるという。百武は、その間のスリルを愉しんでいるのではないか。

百武は、ホテルの人々にも秘密を知ってもらいたいのかも知れなかつた。自分ひとりがかつそりとスリルを感じているのは、面白くないのだ。妻が来る寸前に若い美しい女を、追いかへす。見物の方が、はらはらする。妻は、何も知らない。間拔けている妻の立場を、百武は見物といっしょになつて笑つつもりであらうか。

沖は、百武の妻に同情をした。見たこともないひとに同情をするのも、おかしいことである。が、沖は無責任な見物といっしょになつて、妻を笑う氣持にはなれなかつた。口をぬぐつて妻を迎える百武の氣が、知れないのである。が、百武は今日までに、いく度かそういうスリルを味わつて來ているのであらう。そうしたスリルを味わうことの出来るのも、やはり金の力ということになる。金の力に思い知らされている故に、百武社長には、いくつになつてもこの種のスリルが忘れられないのかも知れない。

沖は、三大銀行といわれた銀行の頭取を父親にもつていた。沖の記憶にある限り、一度も家庭問題でごたごたしたことはなかつた。父親の教育は、厳格でもなかつた。が、無責任な放任というのでもなかつた。沖は父親の性格にしたがつて育てられた。よくも悪くも、父親に似ていることになる。銀行家になりたくないというのを許されて、畑ちがいな国文学を専攻することになった。大学院に残り、間もなく母校の教壇に立つことになった。助教授となつた時、父親が亡くなつた。すると、母があとを追うようにして死んだ。ひとりの姉は、外交官に嫁いで、目下欧州の大使館につとめる夫とともにいる。沖は、恵まれすぎたと言われるだらう。戦争中は、海軍主計少尉であつた。軍艦にのりこんだこともなければ、外地に出たこともなかつた。危い目にもほとんど会っていない。沖は、金銭の苦しみを知らなかつた。大学の助教授となり、生活に困ることもなく過していられるのも、父親が美田を^{ミタ}に残してくれたからである。そのため沖一英は、百武社長がスリルを感じるその精神のあり方が不思議でならなかつた。妻の立場を見物といっしょになつ

て面白がつていられるようになるまでには、百武は、自分の心を、さんざん他人の土足でふみにじられたにちがいないのである。自分自身にむごく当らなければ生きられなかった過去の苦闘が、本人をそう仕向けたものである。自分の心の扱い方が、沖とはまるでちがつていた。

自分を、これやすい、薄い瀬戸物のように感じる事がたびたびである。育ちに対して、沖は一種のコンプレックスを持っていた。百武のような生活者には、圧倒されてしまう。

朝方、沖は目をさました。起きるには早い時間である。ホテルは、静まりかえっていた。窓を開けると、網戸から早朝のつめたい空気が待ちかまえていたように流れこんだ。思わず襟をかき合あす。

鬱蒼と茂った樹々の僅かな隙間から、白みかけている空が眺められた。空は、樹々の黒ずんだ深い緑をはねのけて、ひかえめに輝くようであった。

小鳥が鳴いていた。かっこうの音があつた。うぐいすが鳴いている。その他名も知らぬ小鳥が五、六種も鳴きたてている。夜の白みかかるいっ時は、小鳥の世界のようである。鳴き声は、屋間や夕方に聞くよりも澄んでいて。

沖は、ふと、赤松の幹に目をとめた。そこに、何かが小さく動いていたからである。小さい、灰褐色のものが、幹をよじのぼったり、逆さに下りたりして、小枝の切り口にかかると、何かを食べているように前脚と顔を動かしている。リスだった。

動物園で見るリスより、一トまわりは小さかった。リスのいることは沖も聞いていたが、目撃したのはこれが最初であった。沖はおどかすのは可哀そうなので、じっと身動きもせずに見守った。リスは地上に下りると、はねるように駆けて、また別の樹にのぼりはじめた。

去年の夏、沖は、ホテルの庭を三、四羽の子をつれた雉が通りすぎるのを見かけたことがある。雉は、たえず駆足をしていた。逃げていくように歩きながら、餌をつまんでいた。その駆足は、半分空をとんでいるような忙しさであった。

「このホテルの裏山を大きく買った土地興業会社があります。いずれこの辺一帯を、軽井沢温泉として宣伝するつもりでしよう。軽井沢に温泉の出ることを知っている人は、意外に少ないのです。鉱泉ですので、わかさなければならぬのです。が、温泉の出るのは、この三笠だけです。七、八年も経てば、この三笠のふん囲気も大いに変わることでしょうね」

ホテルの支配人が、沖に話したことがある。

その時になれば、リスも山奥に逃げ、雉も姿をあらわさなくなるであろう。年々、軽井沢に都会の匂いが侵入する感じは、濃厚になっていく。旧街道には、銀座の有名な呉服店が支店を出している。避暑がてらの商いである。ここで知合になれば、東京にもどってからも、客は銀座の店に来てくれるというものである。

その日の屋下りに、沖は食堂からロビーに戻って来ると、目のさめるような若い女性がひとり、車から下りるのを眺めた。

ホテルで二、三日泊っていった或る洋画家が、沖にこう言ったことがある。

「夏の軽井沢には、美人が多いですね。都会の美人を、かき集めたように感じますね。職業をもっている美人でなしに、上品な、いかにも美人らしい美人です。職業婦人の美人には、職業が或る種的作用をしていて、美しく見えるものですが、そういった階級でない美人です。東京でも時々そんな美人を見かけますが、夏の軽井沢にはそういった美しい人が集まっているようです」

画家らしい解釈として、沖は軽く聞き流していたものだが、いま車から下りて、ホテルの石段を上って来る女を見た時、画家のことばが思い出された。東京では、めったに会えない美しい女であった。女優ではないかと、一瞬、疑った。

深い海の色の厚地の直線的なツウピースの女は、ホテルの出入には慣れた人のように、まっすぐフロントに近付いて来た。最初の印象で、フロントでは、客の素性に見当をつけるものがある。白い帽子、白い手袋、白い靴のアクセントの使い方は、その女の生活にいかにも巧みにとけこんでいるらしかった。一米六〇の余はあるだろうか。さっそうとして、近くに沖一英が立っているのを無視した。それが、すこしもわざとらしくなかった。昨日の芸者の洋装とは、人種がちがっているようであった。

沖は、二十五、六かと眺めやった。背が高いので、すこし老けてみえるかも知れない。青白いほどの生地は、蠟人形を思わせた。

大きなひとみと、くちびるの形に、沖はつよい感じをうけた。いかにもくちびるに紅を塗っているという口もとが多いのだが、その女の口もとは、紅のためにくちびるが、つくられたといった風な、迫るような形をしていた。すこし大きめだが、ひとみの大きさにつり合っている。沖のうけた最初の印象では、人妻とは思えなかった。しかし、処女といった感じでもなかった。処女の生硬な感じは、あとかたもない。女はフロントのボーイに話しかけた時、ちらりと沖の方を見た。コケティッシュな感じでもあったが、意外につよい、冷たい感じでもあった。聡明を思わせる顔立である。が、ひとみとくちびるは、情熱を思わせた。鼻の形には特色がなかったが、あいまいな線でもなかった。そういえば、女の顔には一点のあいまいさもなかった。若さが内部からあふれているといったふうな顔でもなかった。

「はあ、百武社長さんですか」

と、ボーイが女客のことばを復習するように言ったのが、沖の耳にはいった。

「はい、社長さんはおいででございます」

狼 狼

二人の水商売の女が旧街道へみやげものを買いにでた留守であつた。百武は部屋で新聞をひらいていたのだが、眠くなつたので、ベッドに仰向けになると、そのままうたたねをしてしまつた。風のつよい海岸に立っている夢をみていた。窓があいていた。樹々のあいだをぬけてくる風が、窓から流れこんでいた。窓をあけているのでは、すこし寒いくらいである。

百武は、ノックの音で目をさました。ノックはひかえめに、くりかえされた。

「おはいり」

つれの女だろうと思つた。百武はすぐには起き上りたくなかつた。快いつかれが、全身を怠惰にしている。怠惰な気分になつてゐることは、また愉しかった。

百武は、ひとりで一室を占めていた。つれの二人の女は、すじ向いの部屋にはいつている。真夜中に、そのひとりがあたりの気配をうかがい、そつと百武の部屋にしのびこんできた。どちらの女かと詮索することは、氣のどくである。百武の情人は、だれの目にもそうであることをかくしてゐたいのだった。

そのため、カムフラージの役をつとめるもうひとりの友達を

つれて来たものである。情人は、友達にも、百武の部屋にしのびこむことをかくしてゐたいのだった。そのため、二人の女はベッドにはいつて、眠りにつくと、どちらもほんとうに眠つたようなふりをしていた。情人は友達に眠つたのをみすまして、そつとベッドから下りる。

物音をこらして、扉をあける。そしてまた、どれだけ経つて、情人はそつと戻つて来て、ベッドにもぐりこむ。友達が都合よく眠っていることに感謝をする。情人は、今度はほんとうに眠つてしまふ。

しかし、友達に眠つてはいないのである。百武の情人がそつとベッドを下りるところから知っている。足音をこらして部屋を出ていく。そして、どれだけ経つて戻ってくる。お役目をはたしてかえつてきた情人を、眠つたふりをして迎える。情人は安心して、眠る。自分も今度は安心して、眠りにはいるのだつた。

「どこへ行つたの」

と、声をかけることは、情を知らぬというものである。彼女たちの生活では、そういうこともやむをえないのであつた。相身たがいである。金銭に奉仕するためには、それもまた余儀ないことであつた。

はいつて来たのは、ボーイであつた。

「なんだ」

と、百武はベッドに半分起き上つた。

「お客さまでございます」